東京新聞 300 文字小説投稿（没）作品

とにかく、小説を書く第一歩を記そうと思い、できるだけ短い作品で応募できる賞を探していたところ、東京新聞が主催する 300 文字小説というものを見つけました。

それで、さっそく案を練ってみるのですが、なにぶんこれまで小説など書いたこともなく、また巷にあふれる小説書きの指南書を紐解いてみても、主に長編作品を念頭においた記述が多く、あまり参考になりません。

小説現代の「ショートショートの広場」やＳＦマガジンンの「リーダーズストーリー」は 2000 字なので、着想の参考にはなりましたが、やはり字数の制約が違いすぎると思いました。

それで、発案者の川又千秋氏の『300 字小説』や過去の入選作品を見ながら検討した結果、結局、詩のようなものでいいのかな？と狙いをつけて、はじめて書いたのが「流星の彼方へ」でした。それは、ちょうどその時期に極大となったペルセウス座流星群ではじめて流星を見た経験を、なるべく絵のように記録しようと書きました。

それから、毎朝 1 本ずつ書いていきました。「トリアージ」は救命救急、「張り込み」「コレクター」は刑事もの、「撫肩の彼」「新しい恋」は恋愛、「英雄」はローマ史、「乳房」は病院ものと、思いつくままに色々な場面を描いてみました。どのようなジャンルが自分に合っているのかを確かめる作業でもあったと思います。

「真剣」は時代劇ものですが、ブラッドベリにギロチンをネタにした同種の作品があることを最近知りました（「乙女」）。ブラッドベリの短編集を最近色々と買って読んでいますが、やはりわたしにとっては短編作家としてもっとも尊敬できるのはモーパッサンです。

長い前置きになりました。すべて没になった作品ばかりですが、もしちょっとおもしろいかも、と思われる作品がありましたら、とてもうれしく思います。

2010 年 12 月 4 日

川越敏司

流星の彼方に（2010 年 8 月 26 日）

　僕はいま銀河の辺境から宇宙を眺めている。

　明るく光っているのはジュピター。
　横に傾いた M の字はカシオペア。
　その真ん中にあるのがペルセウス座。

　星以外に何の照明もない裏庭に寝転んだ僕は、じっと息をひそめ、瞬きもせず、東の空の星座を両目いっぱいに映しながら、星が流れる瞬間を待ち続けている。

　「あっ流れた！」

　やっと迎えに来てくれた。僕は、星の仲間たちと交信を開始する。
　さようなら。流星の彼方、遠く離れた銀河に向かう僕は、家族に向けて最後のあいさつを送る。

　耳を澄ますと、鈴の音のようなコオロギの鳴き声に、遠くで聞こえるチャルメラの音。
　地球の引力が僕の決心を鈍らせる。母さんの呼ぶ声に、僕はゆっくりと腰を上げた。

（完）

トリアージ（2010年8月27日）

列車が転覆した現場に駆けつけると、そこはすでに修羅場と化していた。
髪をふり乱し、泣き叫ぶ声。まさに阿鼻叫喚の地獄絵だ。

これが現実。大学で習った知識など、何の役にも立たない。
ベテランだって尻込みするような光景に、新人のわたしは身震いして立ち尽くすだけ。

しっかりするのよ、真由美！

わたしは両手で自分の頬をパチンと打ち鳴らして気合を入れた。

「ほら、救急箱。モタモタしないで！」

先輩の指示が飛ぶ。わたしはすばやく消毒液とガーゼを取り出し、一番傷が浅そうな男の子のところに向かい、鼻血の後をキレイにふき取ってあげる。

こうしてわたしの初出勤は、園児たちによる壮絶なおもちゃの取り合いから始まったのだった。

（完）

張り込み（2010年8月28日）

　間違いない。オレは相方とうなずき合う。

　目撃情報によれば、犯行は決まって早朝だった。そこで連日、早朝から張り込みを続けてきた。今日こそ動かぬ証拠をつかむチャンスだ。

　身を乗り出して飛び出そうとする相方の腕を押えて、待て、とオレは目で合図する。こういうのは現行犯で捕えないとダメなんだ。

　物陰に息をひそめてじっと様子を伺っていると、ついに動き出した！
　オレたちはすばやく犯人のもとへ駆け出していく。

「やっぱり、あなただったんですね」

　しおらしく犯行を認めるかと思いきや、悪びれた風もなく開き直っているから困りものだ。

「おばあちゃん、カラスに餌をあげるのはやめてください」

　町内会役員も楽じゃない。

（完）

コレクター（2010年8月29日）

　今回狙われたのはブロンドだった。これで3件目だ。
　それにしても、白昼堂々なんて大胆な犯行なんだろう。付近に聞き込みをしてみたが、いまだ目撃者は見つかっていない。

　でも、犯人の目星はついている。あとは、彼女たちがどこに連れ去られたかだ。監視の目を強化して、次の犠牲者が出る前になんとかしなくては。

　どうやら、またホシは動きだしたようだ。あたしは感づかれないように、そっと尾行を開始する。

　見ると、裏の雑木林に入り込んでいった犯人が地面を掘り返して、犠牲者を生き埋めにしようとしているところだった。ついに犯人のしっぽを押さえた。

「だめじゃない。お人形をこんなところに埋めちゃ」

　シロはしっぽを垂れた。

（完）

撫肩の彼（2010年8月29日）

　彼は、いつの間にかわたしの横で寝息を立てていた。彼の温もりを感じる。

　あたしが働きに出ている間、仕事のない彼は、ほとんど寝て過ごしている。その反動か、彼は毎晩のように家を抜け出して、夜遊びが絶えない。

　とはいえ、家に戻って来ない日は一度もなかった。どんなに浮気しようが、必ずあたしのところに戻ってきてくれる。

　あたし、料理には自信あるんだ。だから、彼もそんなあたしを捨てることはできない。そうだ、今日は彼のお気に入りのご飯を用意しよう。

　あたしはベッドの傍らに腰かけながら、彼の寝顔を見つめる。愛おしくなって、ぎゅっと彼を抱きしめる。

　と、彼は急に身体を強張らせて叫んだ。

　ニャー！

　ごめん、ミケ、起しちゃった？

（完）

乳房（2010年8月30日）

　聖アガタはその乳房を失っても奇跡的に癒されたのだという。
　だんなは、今まさに乳房を切り取られようとする場面を描いた絵画を見せながら、聖アガタの殉教者伝を話してくれた。

　病室のベッドの背にもたれながら、そんなだんなの顔を見つめる。力強く握るだんなの手の中に冷たい感触がして、見ると小さな十字架が握らされていた。

　乳房を失うのは、身体の一部分を失うこと以上の傷みをともなう。女にとっても男にとっても。

　「もう、女じゃなくなるんだよ」

　そう告げた時、きっとだんなはずいぶん悩んだと思う。
　こんな女じゃもう愛せないでしょ？　離婚されてもおかしくないのに。

　誠実で、やさしい人。
　つらい思いをさせてごめんね。

　明日から、ボクは男になる。

（完）

英雄（2010年8月31日）

　蛮族の侵入に次ぐ内乱。帝国は疲弊しきっていた。ローマ市民の不満は最高潮に達し、新しい英雄が求められていた。

　抜群の身体能力を持つ運動選手であったペトロニウスが頭角を現したのはその頃だった。
　彼は、とりわけガリアでの強行偵察の任務でその名声を高めた。圧倒的な敵軍勢に侵入し、無傷で生還した彼に、ローマ人は喝采を惜しまなかった。

　そこで、ペトロニウスは政界に打って出た。激しい競り合いの末、破格の給与を保証することでローマ兵たちの信を得て、彼は皇帝の地位を勝ちとった。

「しかし、約束した給与を支払えなかったら、暴動が起きるのでは？」副官が尋ねた。

「ガリアでのことを思い出せ」

ペトロニウスは高跳びの名人だった。

（完）

月に行く（2010年9月1日）

　月に行くのが夢だった。そんな僕をみんなは馬鹿にしたけど、僕は本気だった。

　シャトルに乗っての月旅行は現実のものになった。でも、そのチケットを買えるのは一部の金持ちだけ。僕のような庶民の子には高根の花だと思われている。

　明日になればみんなはきっと驚くに違いない。僕の思いが本気だったことに。

　いま目の前には月が大きく見えている。手を伸ばせば届く距離だ。体が軽くなって、バランスを取るのが難しい。両手で泳ぐようにして進む。

　月の重力は地球の六分の一。月へ行けば、僕が背負っているこの重荷も六分の一になる。そんな思いが僕を勇気づけた。

　静かな闇が僕を包んでいる。

　時折、水が鼻に入ってきて、痛い。

　月まであともう少しだ。

（完）

真剣（2010年9月1日）

　あたいは真剣なんだからね、捨てたら承知しないよ！

　いつもは俺の腰にすがっておとなしくしてるおまえが、今日はずいぶん威勢がいいじゃねぇか。安心しろ。俺がおまえなしで生きていけるわけねぇだろ。

　維新だ、攘夷だって、世の中騒がしいじゃない。苗字帯刀を許されたお侍だからって、今まで通りにゃいかないよ。おまんま食えなくなったら、あたいのことなんて簡単に捨てちまうにちがいないさ。

　俺は侍だ、他の生き方なんてできやしねぇ。だから、地獄の果てまでお前と一緒だ。

　だったら、ひと思いにやっておくれ。あんたと添い遂げられて、あたいは幸せだよ。

　武士は長年寄り添ってきた真剣と一体になった。武士に抱かれた真剣は無言でその血を吸った。

（完）

新しい恋（2010年9月2日）

　手編みのマフラーに、手作りチョコレート。女の子の大切なものだって、惜しみなく与えてきたのに.....　ひどい！

　親友のマユコの肩をびしょびしょに濡らして、あたしは終わってしまった彼との恋物語を延々と語り続けた。

「これ聴きなよ」

　マユコが貸してくれた曲を聴いて枕を濡らしたら、涙が乾くころには少し元気になった。

　放課後、マユコのいる弓道部の練習場にＣＤを返しに行った。

　ふと、袴姿の男の子と目があった。狩人の前にうっかり飛び出したカモシカのように、あたしの心臓は貫かれた。

　あたしは彼を部屋に誘った。今日は手料理をごちそうするんだ。

「ホントにオレでいいの？　先生」

　そう尋ねる彼の手を、あたしはぎゅっと握った。

（完）